

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第26巻 第4号



白水滝

白水滝は白山東方の岐阜県大野郡白川村地内の大白川にかかっている滝で、大白川の支流の湯谷と大白水谷と小白水谷が合流するところより下流約300mの位置、標高は約1,180mにあります。白山の登山道の一つである平瀬道の登山口の近くです。白水滝もしくは白水の滝と表記し、一般に“しらみずのたき”といいます。“華厳滝”や“那智滝”と共に、古くから日本三名瀑の一つといわれています。はくさん第26巻第2号と第3号の表紙で紹介してきた百四丈滝や不動滝と同様に白山火山の溶岩にかかっている滝で、溶岩が冷え固まるときに形成される柱状節理がみごとに発達し、落差は72mあるといわれます。この溶岩は、白山の三主峰の一つである剣ヶ峰を形成した活動の際に流出したものと考えられており、その年代は約2,900年前と推定されています。

(東野外志男)



宿の岩から望む白山

伝説の禅定道

松山 和彦

白山登山の始まり

白山へ登る目的は何かと問われた場合、現代では健康増進やレクリエーション、あるいは自然観察などの理由をあげる人が多いかと思います。しかし、江戸時代以前ではほとんどの場合、信仰を目的としたものであり、それも女人禁制といって男性にしか許されていませんでした。では、人々はいつの頃から信仰を目的として白山に登るようになったのでしょうか。白く冠雪した白山を平野から仰ぎみて、その気高さゆえにそこに神々の住まう世界を思い描くようになったのは太古の昔からと考えられます。やがて時代は移り、白山に登って直接その神々の世界と触れ合ってみたいと熱望する人々があらわれてきます。それは奈良時代から平安時代の初め頃の若き修行僧たちでした。神様の山なのに仏様を拝む僧侶が・・・ここで不思議に感じる方もいるかもしれませんが、白山の女神は十一面観音という仏の化身であると長らく信じられてきた歴史があるのです。

まず、白山に初めて登り白山を開いた人物として世に広く知られているのは、^{たいちよう}泰澄大師という僧侶です。奈良時代の初めの養老元（717）年、36歳の時に神のお告げにより白山の登頂に成功したとされています。続く平安時代の前期、9世紀になると、確実な白山登山の記録が登場し始めます。承和年間（834～848年）頃に2羽の鳥に導かれ白山に登ったと伝えられる比叡山（滋賀県）の宗叡や、元慶2（878）年の春に白山に入山したという度賀尾寺（京都市梅尾にある高山寺の前身）の賢一などがそうです。それを裏付けるかのように、白山の山頂付近の学術調査によって最古の登山者の痕跡として、9世紀後半の土器が確認されています。後述する加賀馬場の話も含め、白山で信仰登山が本格化した時期を現時点では9世紀頃とするのが無難ではないでしょうか。

加賀禅定道とは？

歴史的にみて白山への登山道は、石川県の加賀以外にも越前（福井県）や美濃（岐阜県）からの道がありました。これら三筋のルートは、山麓の各地に住む人々が、それぞれに信仰の山、白山へアプロチするなかで、別個に成立しました。そして、これらの道は加賀禅定道・越前禅定道・美濃禅定道と呼ばれました。『白山之記』という白山比叡神社に伝わる加賀の地で記された白山に関する最古の縁起（由来を記した書物）は、天長9（832）年に加賀・越前・美濃の白山の三方において馬場（登山口にあった登山のための拠点）が同時に開かれたと伝えています。つまり加賀であれば、加賀馬場と白山山頂を結ぶ道が加賀禅定道なのです。なお、『白山之記』は別名を『白山縁

起』ともいい、長寛元（1163）年頃に原型が成立したとされる古い書物です。

さて、「禅定」とはいったい何でしょうか。『白山之記』では御前峰の山頂そのものを「禅定」と表現しています。一方、『広辞苑』で「禅定」を調べると、仏教用語で「心を静めて一つの対象に集中する宗教的な瞑想」とあります。ここで想像をたくましくすれば、白山山頂の御前峰こそがそのように瞑想を行って仏の世界・悟りの境地に到達することができる場所、それにふさわしい場所である、そう平安時代の人々に意識されていたのかもしれませんが。つまり、白山へ登ることは、禅定の境地への旅路に他ならなかったのではないのでしょうか。

ししく 獅子吼尾根の禅定道

続いて加賀禅定道のル - トについて触れたいと思います。加賀禅定道という登山ル - トは、現在も一里野温泉スキー場のある尾口村尾添地区と白山山頂とを結んでいます。この登山道は、大正時代頃から次第にさびれ一旦は廃絶しましたが、昭和62年に地元民の熱意で復活しました。尾添から登り始め、檜新宮という神社の跡を経て奥長倉山、四塚山、大汝峰と越えていく、行程約20kmの長い尾根道です。『白山之記』は、道沿いの檜新宮が10世紀頃に^{によぜぼう}如是房という人によって建立されたと記していますから、上記の尾根筋には平安時代からすでに加賀禅定道が通じていた可能性が高いのではないのでしょうか。

では、加賀における白山信仰の中心を占め、また加賀馬場の中心でもあった白山本宮、つまり今の鶴来町の白山比咩神社から、その尾添まではどういうル - トで行ったのでしょうか。江戸時代にはすでに国道 157号線や 360号線を利用する現在のル - トの旧道が成立していました。しかし、白山が開かれて間もない平安時代の禅定道はどこをどのように白山へ向かったのでしょうか。この問題に答えてくれそうな一冊の書物があります。次に紹介する『白山諸雑事記』です。

これは、江戸時代前期に白山本宮の^{ちようり}長吏であった^{ちようい}澄意という人によって著されました。当時の白山本宮は白山寺という寺院と一体になっていましたが、長吏というのはその全体を統括する最高の位です。彼は享保10（1725）年に89歳で亡くなりましたが、現在ではすっかり失われてしまっている白山に関する古い言い伝えを文字にして残してくれました。そのなかに加賀禅定道に関する記述もあります。17世紀には遠い過去の記憶と化していた、いわば伝説の禅定道です。原文は文語体で難しいので、現代風にアレンジすれば次のようになります。

「鶴来の町の裏山に“せんの堂”というお堂があつてな、昔は白山へ向かう人達はこのあたりから獅子吼の尾根伝いに行ったそうじゃ。“せんの堂”に泊まる人もおつたそうじゃよ。」

「鶴来の隣の八幡村の裏山には“ケイリンバヤシ”と呼ばれる林がある。この続きの尾根も白山へ向かう道筋で、昔は山伏などが頻繁に通つたようじゃ。尾根筋をずっと行けば、河内の板尾村の山に出る。そこに“^{ししく いわ}宿の岩”という大きな岩がある。ここは泰澄大師が修行された場所と伝えられとる。大師にあやかつて夏の間ずっとそこで修行する人も多かつたそうじゃ。」

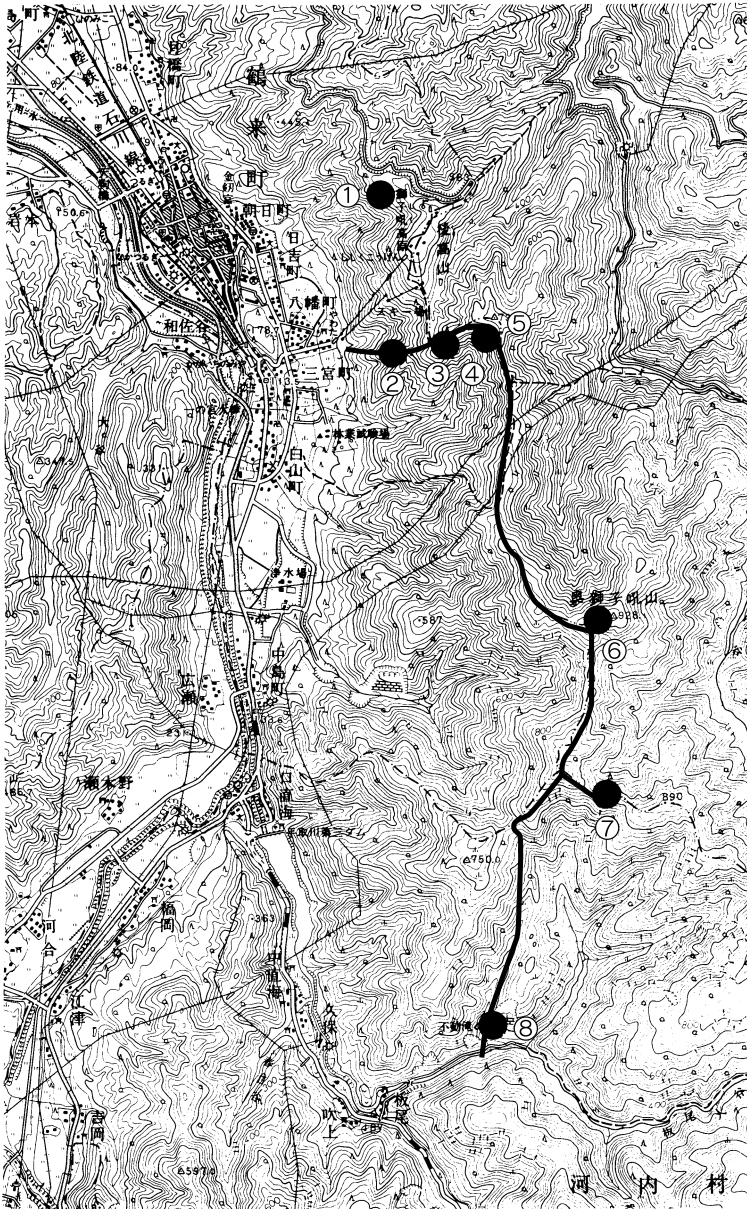


加賀禅定道周辺図



獅子吼尾根の道

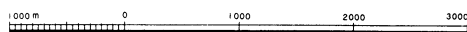
現在の獅子吼高原（後高山）から奥獅子吼山に続く尾根道が加賀禅定道である。そんな言い伝えが江戸時代前期まで鶴来には残っていたようです。今は獅子吼口 - ブウェイの山麓の発着場の脇から登り始め、奥獅子吼山を経て宿の岩までハイキングコースが整備されています。宿の岩からは不動滝を経て河内村の板尾地区に下ることもできます。鶴来町の一ノ宮公民館が刊行した『加賀一ノ宮郷土誌』なども参考にし、沿道の旧跡などを簡単に紹介します。



伝説の禅定道周辺の旧跡

- せんのだう
- 金剛童子の祠跡
- 護摩堂
- ケイリンバヤシ
- 寺屋敷
- 奥獅子吼山
- 宿の岩
- 不動滝

実線は現在のハイキングコース
（5万分の1地形図「鶴来」に加筆）



せんの堂

獅子吼高原（後高山）の西北斜面、標高500mの地点の鬱蒼とした杉林の中に数段の大き平坦面が築かれています。周辺からは平安時代の土器が採集されています。

金剛童子の祠跡

口 - プウェイの駅からの登り坂の途中にあったといひます。金剛童子は山で修行する人達を守るとされ、美濃馬場の長滝寺（岐阜県白鳥町）では境内に祀られています。

護摩堂

先の登り坂を登り切ったところに、近年まで地蔵を祀る建物があり、その付近が護摩堂と呼ばれています。ここでは護摩が焚かれていたのでしょうか。

ケイリンバヤシ（きらんばい）

護摩堂から少し登った付近で、かつては桂の林があったともいひます。泰澄大師が修行した聖地ゆえに木を伐ってはならない場所とされてきました。

寺屋敷

護摩堂から坂を登り切ったのち、等高線に沿った平坦な道を進むことになります。道沿いの杉林の中にある小さな平場が寺屋敷です。ここには水場もあります。標高は650mです。

奥獅子吼山

獅子吼高原ができるまでは、獅子吼といえばこの山を指しました。標高928mで南に遠く白山を望むことができます。女人禁制の折、女性はここで白山を遙拝したといひます。

宿の岩

ここまで来た尾根道を東に少し下った標高800mの所にあります。この付近からの白山の眺めには素晴らしいものがあります。ちょうど加賀禅定道越しになります。大きな岩が四つあり、その白山に面した側にここで修行した僧侶の名前が刻まれています。そのうちの「寂善坊」は、白山比咩神社の古文書にもみられ、南北朝時代（14世紀）頃の人と推測されています。



宿の岩

不動滝

落差50mの滝で、ここで修行が行われたといひます。

澄意による記述は、宿の岩付近から先については明らかにしていません。あくまでも推測の域を出ませんが、宿の岩や不動滝のある板尾地区からは、直海谷川対岸の吹上地区を通過して山越えて吉野谷村の吉野地区に向かったと考えるのが最も無難といえましょう。

興味深いことに伝説の禅定道の道筋には、白山を開いたとされる泰澄大師にまつわる言い伝えも残されており、白山への旅路は大師の遺徳を偲ぶ旅でもあったのでしょうか。新緑・盛夏・紅葉などの季節の移ろいを楽しみつつ、獅子吼尾根の快適なハイキングで、いにしへの白山登山者に心を馳せてみてはいかがでしょうか。

本稿に使用した写真は鶴来町立博物館の小阪大氏よりお借りしました。

< (財) 石川県埋蔵文化財センター >

手取層群から発見された コリストデラ類

松浦 信臣

手取川上流の白峰村・尾口村・吉野谷村に分布する中生代白亜紀前期の手取層群は、近年恐竜などが産出したことで大変有名になりました。さらに最近は恐竜だけでなく、哺乳類型爬虫類・翼竜類・トカゲ類・亀類などの爬虫類や鳥類・魚類など様々な脊椎動物が産出したことで、以前から多量に産出した植物・貝類の各化石とともに一層有名になってきました。このような脊椎動物化石は、白峰村桑島の通称「桑島化石壁」を中心に白峰村や尾口村の所々で産出しています。

今回紹介するコリストデラ類(Choristoderans)は、桑島化石壁ではなく、白峰村市ノ瀬から別当出合へ行く道から脇道に入った柳谷川ぞいの一露頭から産出したものです。ここは桑島化石壁と同様に砂岩・頁岩の互層からなりますが、同じ手取層群でも桑島化石壁が桑島層であるのに対して、桑島層のすぐ上の地層である赤岩層下部に属しています。この白峰村市ノ瀬東方の赤岩層下部の分布地は、従来は、あまり化石の産出が知られていないところで、特に脊椎動物化石については、これまで発見例がない地域でした。白山恐竜パーク白峰化石研究会は、この地域が白山国立公園内であるため、環境庁の許可を得て、平成5年からこの地域の化石の調査を行い、いくつかの成果をあげてきました。コリストデラ類はその中の一つです。

日本で2例目の記録

平成8年に、岐阜県荘川村の手取層群大黒谷層(桑島層と同じくらいの古さと考えられています)から、ワニに似た淡水生爬虫類のコリストデラ類の化石が見つかったということが報告されました。化石は頭部から骨盤まで全長約35cm、日本で最初の記録でした。一方、柳谷川ぞいの一露頭では、亀類甲羅や各種貝類・植物葉体などの化石とともに、いくつかの骨化石が産出していました。その後の鑑定によれば、その中に、コリストデラ類の大腿骨・脊椎骨・肋骨が含まれていることが分かったのです。このコリストデラ類の産出は、岐阜県に次いで日本における第2例目の産出記録でした。

コリストデラ類とは

コリストデラ類はヨーロッパ・北米・アジア(内モンゴル)などの中生代から新生代古第三紀(約2億4,500万~2,400万年前の範囲内)の地層から見つかっています。アジアのコリストデラ類では、内モンゴルで約1億年前の白亜紀中期のものが産出していますが、手取層群のものは白亜紀前期(約1億3,000万~1億4,000万年前)のもので、アジア最古ということになります。

このコリストデラ類の仲間的一种で、北米産のチャンソサウルス(*Champsosaurus*)は、全長2mに達する進化したタイプとして有名です。チャンソサウルスはその頭骨がワニに似て顎が細長く突出し、淡水生で魚を食べていたようです。その生息時代は白亜紀後期から新生代古第三紀始新世(約9,000万~3,500万年前の範囲内)です。白峰村柳谷産のコリストデラ類はチャンソサウルスではないのですが、体長1m近くと考えられ、基本的体形はチャンソサウルスに似ていたと考えられます。また、現生の生物から見れば、ワニに似たところやトカゲに似たところもあったのではないかと考えられています。いずれにしても、現存しない爬虫類のグループと考えられるもので、生物進化を考えるうえで興味深い存在です。

<白山恐竜パーク白峰>



コリストデラ類を産出した白峰村柳谷川ぞいの一露頭



コリストデラ類とともに産出する代表的な動物化石
 上：貝 淡水生と考えられているテトリニッポノナイア
 (*Nippononaia Tetoriensis*) 殻長42mm
 下：亀甲羅 スッポンの仲間の背甲、長さ21mm



コリストデラ類の骨化石

1. 右大腿骨 左写真：背側面観、右写真：腹側面観（写真上方が近位端、下方が遠位側）長さ56mm
 中央上写真：近位側、近位端の幅16mm、中央下写真：遠位側断面、長径7mm
2. 脊椎骨と肋骨へ通じる関節面、長さ20mm
3. 肋骨 左写真：肋骨、長さ38mm、右写真：肋骨の取れた印形と骨の一部、長さ25mm



コリストデラ類の一種
 「チャンプソサウルス」の復原図
 (エリックソン、1972から)

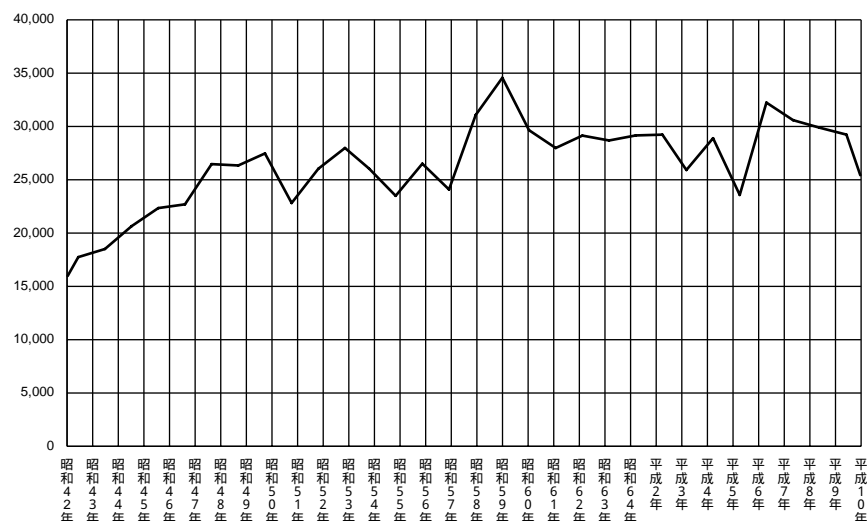
かわりゆく白山

四手井 英一

北アルプスなどに較べて、交通の便が悪くまた独立峰のために開発が遅かった白山ですが、昭和42年に室堂ビジターセンターが改築されて以来多くの登山者が登るようになりました。当時は特別に強い規制も無かったため、弥陀ヶ原は登山者の踏み跡で糞の河原と化し、特に昭和46年頃は、登山口から山頂に至るまであちこちに置かれていたゴミ箱がゴミであふれかえり、そこらじゅうに散乱しているありさまでした。そのとき始めたゴミの持ちかえり運動が成功し、しばらくすると「白山はきれいだ。ゴミが一つも無い」との評判を頂くようになりました。また弥陀ヶ原を含めた登山道の整備もこの頃から始まりました。いかに自然にマッチし、しかも歩きやすくするために、試行錯誤を繰り返しながら現在に至っています。

施設整備が進むとともに、登山者の質が変わり、登山人口も大幅に増えてきました。登山者数について室堂及び南竜ヶ馬場の宿泊者数をグラフに示しますが、昭和40年代始めは15,000人程度だったものが昭和58年頃から30,000人前後の人々が白山へ登るようになりました。それに伴って登山道や宿泊施設などのよりいっそうの改善が望まれるようになりました。登山者についていえば、昭和40年代始めは、宗教的な登山を除けばハイキング気分の人はいませんでした。かなり経験をつんだ登山者が多かったのです。最近では中高年の登山のすすめや、旅行会社が組んだツアーによる登山などの影響もあって、年配の人たちの登山やハイキング気分の登山が増えてきました。また、山小屋が予約制を導入したことや、登山者で混み合う時期に交通規制をかけるようになったことなどから日帰り登山が増えています。それに伴って事故も増えています。単独登山をしていた老人が疲労のために死亡したり、ツアーで来た客が夜中に心臓発作を起こし、夜間のためヘリコプターが使えず、やむを得ず急ごしらえの担架で下ろしたりといった事もありました。

また、犬を連れての登山は、昔は猟師しか考えられなかったのですが、最近、犬連れ登山も増えています。他の登山者にとっては迷惑でしかないし（室堂で泊まった犬が一晩中鳴きつづけて寝られなかったなどの苦情がありました）、排泄物や毛についてきた下界の種子や昆虫、細菌などによって自然のバランスが崩される恐れがあります。ぜひ止めてもらいたいものです。



白山登山者の推移



市ノ瀬ビジターセンター



南竜ヶ馬場



室堂

施設については、昭和60年に市ノ瀬に白山国設鳥獣保護区管理センター（市ノ瀬ステーション）が建設され、現在新しい市ノ瀬ビジターセンターを建設中です。別当出合も鉄筋コンクリート製の休憩所が平成8年に完成しています。

南竜ヶ馬場については、かつてセントラルロッジと野営場近くのケビンだけでしたが、昭和50年に南竜山荘がセントラルロッジの上に、平成8年にケビン5棟が野営場に、更に現在のセントラルロッジの直下に新しいビジターセンターが今年度完成し、来年度から一般に利用できるようになります。ここにはガイドが常駐し、自然観察会や星空観察会、その他各種案内にあたる予定です。

室堂は来年度からビジターセンターの改築が始まり、より利用しやすくなります。主な改築点は、食堂が弥陀ヶ原に面した位置に変更され、夕日を見ながら食事ができること。レクチャーホールが新たに作られ、ガイドによる白山の自然に関するレクチャーを受けることができる点などです。この工事に伴って平成11年から3年間、食事の提供ができなくなるので、登山者は食事については各自用意する必要があります。くれぐれも食料を忘れないようにして下さい。

トイレについては、市ノ瀬に2棟、更に別当出合、登山道途中の中飯場にも新しい水洗トイレができ、甚之助避難小屋もトイレが別棟となり、小屋の中に悪臭が充満する事もなくなりました。南竜ヶ馬場や室堂のトイレについては、以前は垂れ流しでしたが、自然環境へ与える影響や衛生上の問題から、現在は登山シーズンの最後にヘリコプターで下ろしています。

登山道の改修



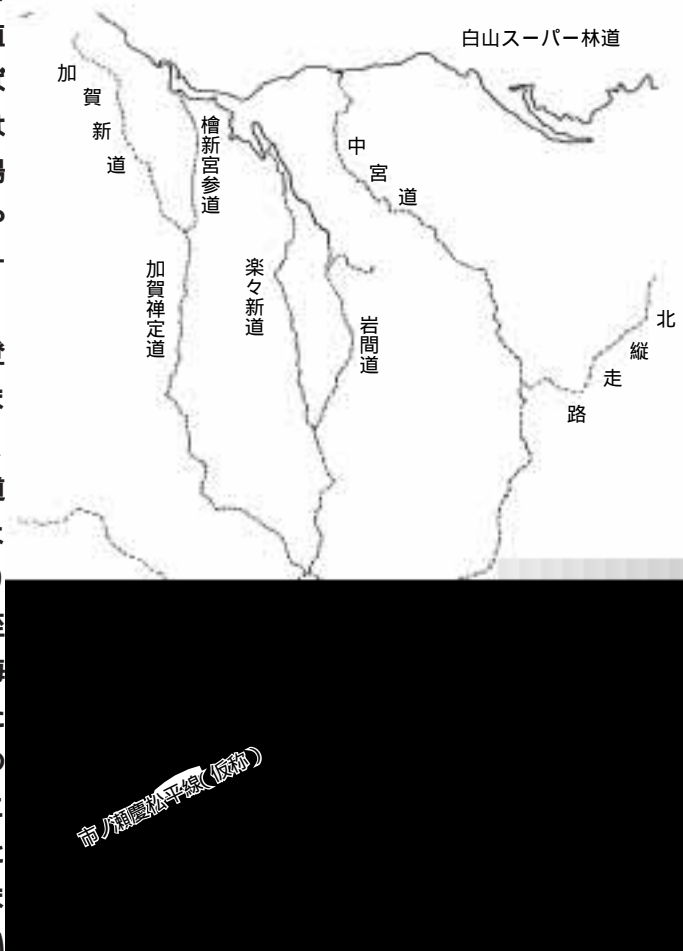
弥陀ヶの木道

登山道については、荒廃の激しいものから順次改良し、特に弥陀ヶ原や南竜ヶ馬場は湿原を守るために、石畳や木道で歩道を作り、水の流れを確保して湿原を保護しています。また、歴史的に重要な登山道の復元も行い、加賀禅定道や越前禅定道の一部（市ノ瀬慶松平線（仮称））などが復元されました。加賀禅定道は昭和61年から

整備され、尾口村一里野～長倉山を経て七倉山で楽々新道と合流します。途中、長倉山を過ぎてから、かつては普通の人にはめったに見られなかった百四丈滝を望見する事ができます。一方、市ノ瀬慶松平線（仮称）は白峰村市ノ瀬～六万山～指尾～天上壁を経て慶松平で観光新道と合流します。

登山道の改良は、沢山の人手と経費を必要とします。特に高山帯の登山道は植生の復元や保護をも兼ねて行わなければならない、都会の道をなおすような訳にはいきません。資材をヘリコプターで荷揚げし、作業員は機械も使えず、重い石や木材を担ぎ、歩きにくい山道を往復し一生懸命なおしています。

しかし、最近の登山人口の増加は、登山道をなおしてもなおしても壊れてしまいます。登山者が歩くと下の石が緩み、そこへ雨が降ると流され、次第に登山道が深く掘られてしまうのです。場所によっては谷になってしまっている所もあります。室堂から岐阜県境を経て南竜へ至る展望歩道は、かつてはハイマツの樹海の中を景色を眺めながら歩ける道だったのですが、今ではハイマツの天井の下の谷を歩くようなことになっています。これをなおすのは大変です。いっそのこと全部舗装したらどうかという案もあります。とにかく今はできるだけ自然に近い形での補修を続ける予定です。



白山の主な登山道と新しくできた登山道

白山も変わりますが、利用する人たちの利用形態もどんどん変わるでしょう。この静かで美しい白山の原始性をいつまでも残していくための努力を続けているところです。

<石川県白山自然保護センター>

ヨセミテ国立公園を訪れて

加藤 友美

はじめに

私は1998年12月末に、日本ネイチャーゲーム研究所主催の「ネイチャーゲームトレック・ヨセミテ自然学校」に参加しました。このツアーは自然ガイドとともに6日間、ヨセミテ国立公園のなかで様々なプログラムを体験しながら、自然との一体感を感じて歩くというものでした。

ヨセミテ国立公園は48か所あるアメリカの国立公園の中でも3本の指に入る美しく人気のあるところ。とてつもなく大きな氷河で削られてできたダイナミックな景観は、訪れるものを感動させ、自然保護の父といわれるジョン・ミュアなど多くのナチュラリストがこの地を愛しました。そして、特に見事な景観が集中しているヨセミテ峡谷（ヨセミテバレー）には、来園者のための受け入れ施設が整っており、そこはハード面（施設）・ソフト面（環境教育プログラム）ともに質が高く、環境教育のメッカとなっています。私たちはこのヨセミテバレーに滞在し、たくさんの自然体験をすることができました。

プログラムは朝から夜まで様々な内容で、私たちに毎日違った感動を与えてくれました。一つ一つのプログラムはまとまりがあり、楽しく体験しながら、学ぶことのできるもので、私たちはヨセミテをじっくり味わうことができました。

その中で一番心に残ったプログラムは、マーセドグローブという場所にある、かつてレンジャーが森林を守るために住んでいた小屋への一泊ハイキングでした。静かで大きな森の中を一人になっ



ビジターセンター



ビジターセンター内の展示



ハイキングのコースには説明板が設置されている



ゴミは細かく分別している



ヨセシテのシンボル ハーフドーム



オスのミュールジカ

てのんびり歩いていくと、世界一大きな生き物、ジャイアントセコイアが出迎えてくれました。セコイアの森に見とれながらさらに歩いていくと、小さな古い丸太小屋に着きました。川に水を汲みに行ったり、薪を割って薪ストーブで料理をしたり、暗くなるまでセコイアと親しくなるゲームをしたり…。夜はランプを灯して食事やゲームをして楽しい時を過ごした後、セコイアの下で満点の星空を眺めながら外で眠りました。翌日は、川で顔を洗って目を覚まし、朝日を浴びながらインディアンの歌を歌い、朝を迎える喜びに浸ります。朝食の後は、ネイチャーゲームを通してこの森に住む動物のことを学んだり、一人の時間を過ごしたり…。セコイアが見守ってくれている中、とても楽しく、また神秘的な時間を過ごすことができました。

便利な機械も時計もない、現代から昔へタイムスリップしたような生活は、私たちに自然と共に生きている、ということを実感させてくれました。それは、ヨセシテの美しい自然と出会った人たち、そして自然ガイドの素晴らしいインタープリテーションのおかげでした。



ジャイアントセコイア

根元の直径は約10m、高さは60～80mにもなる
さて、このセコイアの穴には大人が何人はいれる？

大人が15人はいれる大きな穴でした



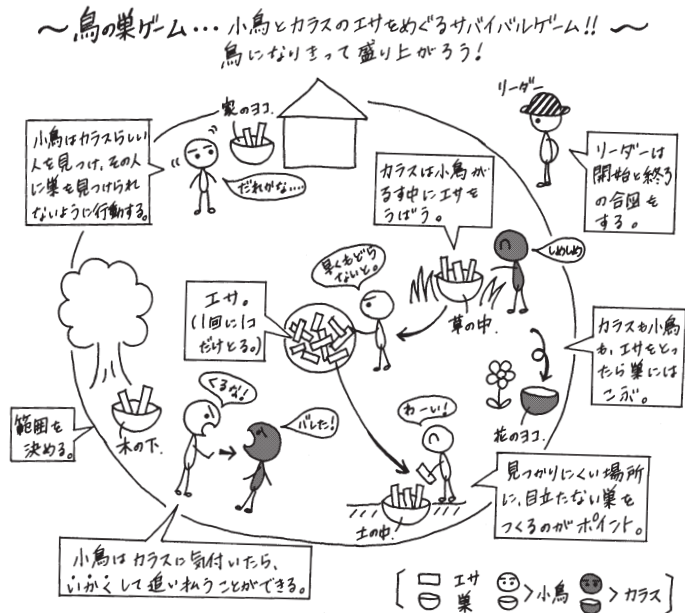
インタープリテーションとは

「インタープリテーション」とは、「自然の発するメッセージを分かりやすく人々に伝え、自然とのふれあいを通じて喜びや感動をわかちあおうとする解説活動」という意味であり、それを行う人のことを「インタープリター」といいます。インタープリテーションの基礎を築いたイーノス A・ミルズは「インタープリターは、自然界の不思議を人々に紹介できるナチュラリストだといえる。知識や情報を与えるというよりは、興味を刺激し、啓発するという要素の方が強い。自然の大原則を素材として、人々に興味を起こさせるのだ。」と述べています。

『では、鳥について解説するとしたら、あなたならどう解説しますか？』

シャーリーはこのように解説しました。「ここにはたくさんの鳥が生活しています。では鳥の巣ゲームをしましょう。」

“エサ（木の枝を小さく折ったものをいくつか）を範囲の中央におく。リーダーが小鳥とカラス（だれがカラスか分からないように。15人中2人ほど）に分けた後、バラバラになり範囲内に帽子などで巣を作る。小鳥はカラスに見つからないような場所に巣を作り、エサを拾って巣に運ぶ。カラスは小鳥の巣からしかエサをとることができないので、小鳥にばれないように巣を襲う。中央のエサがなくなったら終了。巣の中に一番多くエサが入っている人が勝ち！”



このゲームをすると、「カラスも小鳥も生きていくのは大変だ。」など身をもって知ることができます。そしてゲームが終わった後、シャーリーは言いました。「鳥はとても我慢強い動物です。私は鳥を尊敬しています。」私たちはその言葉に共感しました。

鳥を見て、名前を知るだけでは鳥の外面しか分かりません。自分自身が鳥になってみることで、鳥の内面まで分かることになるのです。シャーリーはミルズが述べたように、弱肉強食という自然の大原則を素材として、私たちに鳥に対する敬意と興味を引き起こしてくれたのです。

インタープリテーションとは...遠い昔の、人と自然の関係の再現なのかもしれません。

おわりに

中国の古いことわざに、『聞くことは忘れることなり。見て、聞くことは、覚えることなり。見て、聞いて、やってみることは、理解することなり。』という言葉があります。私がシャーリーから受けたプログラムは、まさにその言葉そのものでした。だから時間が流れた今でも、学んだことを心と体ですぐにでも思い出すことができるのでしょう。

石川県白山自然保護センターでは、日本の国立公園・白山で、このような素晴らしいインタープリテーションを多くの人に体験してもらうための観察会を予定しています。私たちと一緒に楽しい自然体験をしてみませんか？

<石川県白山自然保護センター>

殊才 実

ブナオ山の露氷は、キラキラと輝き、まるでダイヤモンドのようです。イヌワシやクマタカが勇ましく飛び、雪の中で小枝の皮や冬芽を採食するニホンカモシカやニホンザルの姿が見られます。今年は昨年よりも積雪が多く、寒い日が続きましたが、毎週のように訪れる愛好者もいます。初めて訪れた人達もブナオ山の自然や動物たちとの出会いに感動しているようでした。

最近はやかい日も多くなり、本格的な冬も終わり、春の足跡が近づいてきています。春になると、雪崩跡でカモシカとサルが仲良く一緒に採食する姿や、時には冬ごもりを終えたツキノワグマの親子が仲良く採食する光景も観察できるようになります。そして小鳥達のコーラスが良く聞こえるようになり、カタクリ、キクザキイチゲ、ニリンソウ、ヤマブキ、ヤマザクラ等の可憐な花が咲き乱れるようになります。



観察会だより かんじきハイキング～雪の上の観察会～

三原 ゆかり

当センターでは、2月28日曜日に、ブナオ山観察舎周辺で雪上での観察会を行いました。この観察会のねらいは、かんじき歩行を体験しながら、冬の自然にも親しんでもらおうというものです。

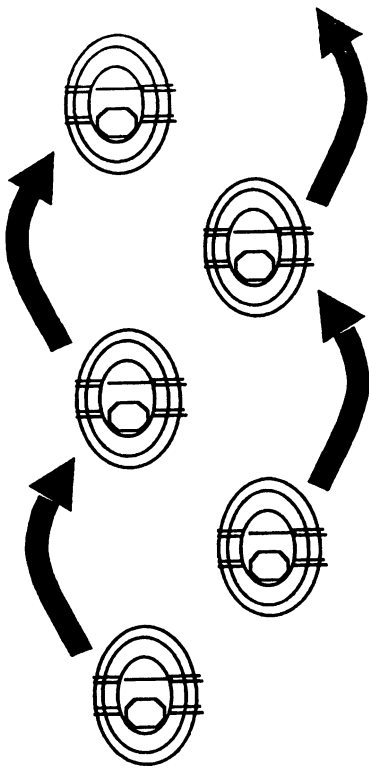
観察会前日は、午後から強風をともなう雪が降り、開催が心配されました。しかし、当日は曇り空ではあったものの、風も無く、時折晴れ間がのぞく良い天気となりました。今回の観察会には30名の参加者が集まり、



これに5名のスタッフが同行しました。歩いたコースは、ブナオ山観察舎から、尾添川左岸の支流オメナシという谷を林道に沿って歩いた後、途中から谷の右岸を尾根の上まであがるコースです。このコースを、昼食・休憩を含め約2時間半かけて往復しました。ほとんどの人が、かんじきを履くのは初体験で、また、家族での参加申し込みが多く、子供の数が多かったのですが、全員が目的地の尾根までたどり着くことができました。見晴らしの良い場所で爽快な空気を味わった後、近くの雑木林で昼食をとりながら楽しい一時を過ごしました。この日は動物ではテン、カモシカ、リスの雪の上に残る足跡が見られ、また、植物では、春に備える冬芽などが観察できました。

ブナオ山観察舎に帰り着いてから、全員に観察会の感想を書いてもらいました。大人の方に最も印象に残った体験について書いてもらったところ、やはりかんじきを履いたことをあげる方が多く、また、新しく気が付いたことについては、「かんじきの履き方は意外と簡単だった」とか、「新雪を歩く楽しさを知った」など、かんじきが便利なものであることを体感した意見が多くあげられていました。子供達がいちばん心に残ったことは、「雪を投げて遊んだこと」、「登りは大変だったけど、帰りは楽だった」、「(斜面を)転がって降りたこと」、「かんじきをはいていっぱい転んだけどあとから上手に歩けるようになった」などでした。また、手で触ったものについては、雪や、つつらが圧倒的に多く、耳で聞いたものについては鳥の鳴き声、風の音の他に、「雪の音」という意見もあり、子供ならではの感性を感じました。

今回の観察会を終えて、一スタッフとしての私の感想は、大人も子供も雪と遊び、触れ合い、くたくたになっても最後まで笑顔が絶えなかったことが、なによりうれしく、よかったと思っています。



はじめてのかんじきに少し不安そう

かんじきは小型軽量で、使いやすく、小回りがきき、走ることもできます。しかし、雪に接する部分の面積が狭いので、少し雪の中に沈み込んでしまいます。

歩くときは、ヒモをしっかりと結び、自分の一方のかんじきで別の足のかんじきを踏まないように、図のようなおいらん歩きをします。



冬の雑木林にも色々で見所がありました

当日観察されたもの

- ・ニホンカモシカ、リス、テンの足跡
- ・アオゲラ、ヤマガラ、コゲラ、コガラ
- ・ミズナラ、コナラ、ハンノキ、タニウツギ、リョウブ、クリ、スギ、ヌルデ、カラマツ、マルバマンサクなど

センターの動き（12月22日～3月26日）

- 1.31 **ブナオ山観察舎自然観察会**（ブナオ山観察舎周辺）
2.28 **かんじきハイキング**（ブナオ山観察舎周辺）
2.28 **白山自然ガイド野外実習**（本庁舎周辺）
3.15～19 **エチオピア研修生受け入れ**（本庁舎ほか）
3.26 **白山自然保護懇話会**（本庁舎）

編集後記

3月15日から19日の間、エチオピアの研修生としてMr. Leykun Abunie が白山自然保護センターにいらっしゃいました。Mr. Leykun はエチオピアの野生生物保護庁の職員で、今回、JICA（国際協力事業団）の研修で、日本の国立公園制度の理解と関連施設の見学のため屋久島や北九州市などを来訪し、その最後に白山に来られました。

センター職員が白山の自然や国立公園の管理などについて説明したのですが、より詳しい説明を求められて、職員が回答に困るような場面もありました。また、実際にブナオ山観察舎でニホンザルやニホンカモシカを観察されたほか、ニホンカモシカの野外調査にも参加されました。

研修期間中にMr. Leykunは、エチオピア固有の動物がたくさんいることや渡りをする鳥の中継地となるなどエチオピアが国際的にも重要な地域であることを話してくれました。また、放牧などのため、土砂の流出が続いていること、多くの国立公園で住民や家畜が入り込み、野生動物の存続に影響があること、自然保護のために、さらなる国際協力が必要なことなど、エチオピアの自然保護に関しての問題について話してくれました。

日本とエチオピア、それぞれの国の環境やおかれている問題が異なり、自然保護を進める上でエチオピアでは日本とは異なった困難さがあることを感じました。（野上）



当センター所長とMr. Leykun

目次

表紙 白水滝	東野外志男... 1
伝説の禅定道	松山 和彦... 2
手取層群から発見されたコリストデラ類	松浦 信臣... 6
かわりゆく白山	四手井英一... 8
ヨセミテ国立公園を訪れて	加藤 友美... 11
施設だより（ブナオ山観察舎）.....	殊才 実... 14
観察会だより かんじきハイキング～雪の上の観察会～	三原ゆかり... 14

はくさん 第26巻 第4号（通巻110号）

発行日 1999年3月26日（年4回発行）
編集発行 石川県白山自然保護センター
920-2326 石川県石川郡吉野谷村木滑ヌ4
TEL07619-5-5321 FAX07619-5-5323
印刷所 株式会社 橋本確文堂

（本誌は再生紙を使用しています）